

2022年5月28日

2022年6月18日

2022年7月9日

第23・24・25回加藤周一文庫公開講演会 『羊の歌』「ある晴れた日に」

[1] 梗概

本章は1941年12月8日、つまり太平洋戦争が始まった日のことを中心に述べられる。この日の朝、大学構内で友人から開戦を知らされる。加藤は周囲の世界がにわかに見たことのない風景に変わるのを感じる。教室に行くとき教授たちが何事もなかったかのように授業を進める。大学から家に帰り、ショパンを聴く。夕方、母織子が何回も止めたにもかかわらず、豊竹古靱太夫が語る文楽の引越興行を見に行くと加藤は記した。そこには「いくさも、燈火管制も、内閣情報局もない世界」があり、何ものをもってしても動かし難い強固なひとつの世界を感じる。それは戦時下の加藤を支えるに足る世界だった。一方、日本軍は真珠湾攻撃から半年間は、破竹の勢いで勝ち進み、東京は有頂天になっていた。詩人や歌人たちは開戦を喜び「つかのまの」勝利を讃え、嬉しさのあまりに涙を流さんばかりだった。しかし、日米の開戦を知った東京以外の世界の多くの都市では「これで勝負は決まった」と歓喜していた。そのことを東京は知らなかった。加藤は多くの人びとと違って「絶対不敗」はあり得ないと考え、日本は負けるだろうと予測する。またしても少数者である自分を自覚させられた。没落の過程にあった家族とともに暮らしながら、大日本帝国の没落を予想していた。そして「没落」を理解する以外に「没落」を超える道はないと考えるのだった。戦争によって大日本帝国がその正体が暴露されたと加藤は考えていたが、実は戦争が暴露したのは自分自身ではなかったかと考えた。それは、自分がいかに生きるべきかを自覚したということであった。

[2] なぜ「ある晴れた日に」という章題をつけたのか

①ふたつのことが連想される

ひとつはプッチーニ『蝶々夫人』のARIA「ある晴れた日に」(第二幕)

もうひとつは立原道造の詩「ある晴れた日に」

②詩の内容から判断するに、立原道造の詩に触発された章題であろう。

立原道造「ある晴れた日に」

悲哀のなかに 私は たたずんで
ながめてゐる いくつもの風景が
しづかにみづからをほろぼすのを
すべてを蔽ふ大きな陽ざしのなかに

私は黒い旗のやうに

過ぎて去る 古ひおもひに ふるへながら
光や 風や 水たちが 陽気にきらめきさわぐのを
とほく ながめてゐる……別れに先立つて

私は すでに孤独だ——私のうえに
はるかに青い空があり 雲が流れる
しかし おそらく すべての生は死だ！
目のまへに 声もない この風景らは！
そして 悲哀が ときどき大きくなり
唄れた鳥の声に つきあたる

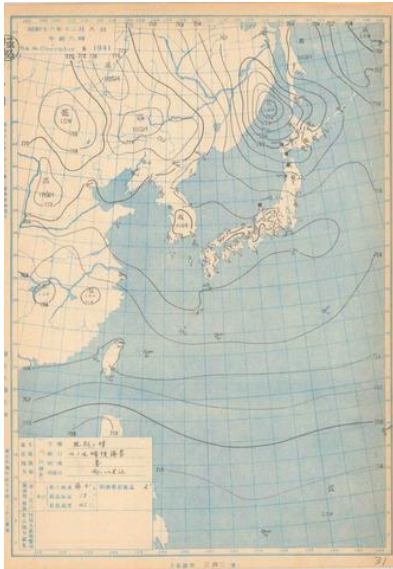
[3] 第1段落

ある晴れた日の朝、私は同級の学生たちと共に、本郷の大学の医学部の構内を、次の授業のことなどを考えながら、附属病院の方へ向って歩いていた。そのとき、学生の一人が、本郷通りで手に入れた新聞の号外を読みあげた。すると私たちの間には、一種のざわめきが波のように拵った。誰かが何かを言ったというのではなく、いわば言葉にならぬ反応が集っておのずから一つの溜息のようなものになったのであろう。私たちは、そのとき太平洋戦争という事実と、向きあっていた。

(169頁、改版)

(1) 「ある晴れた日の朝」とは

1941年12月8日の天気図を見ると、高気圧が西日本、東日本を覆い冬晴れが広がった地域が多かった。



この日から天気予報は気象報道管制によって軍事機密とみなされ一般に公開されなくなり、ラジオや新聞の天気予報もなくなった。

1942年8月27日に九州に上陸した周防灘台風によって死者・行方不明者1158人の被害が発生したが、台風情報が住民に届くのが遅く、かつほとんど情報内容が伝わら

なかったことが被害を大きくしたといわれる。なお、天気予報の新聞・ラジオによる再開は、敗戦後の1945年8月21日のことである。

(2) ざわめき

『羊の歌』には、大学構内で、ある友人が号外を読みあげ、「一種のざわめきが波のように拵った」と記される。相当に大勢の人が聴いていなければ、ざわめきが波のように拵らな

ところ、加藤が学生時代につけていた『青春ノートⅧ』の「一九四一年十二月八日」には、少し違って記される。

「K君が大学の裏門を潜った所で、無造作に話しかける。《とうとうやったね》」。

加藤は開戦の事実を友人の話で知ったとある。『羊の歌』に書かれる状況は、あるいはそのあとのことかもしれない。あるいは文学的虚構か。

(3) 太平洋戦争開戦

1941年12月8日の日本時間午前3時に(現地時間7日午前8時)、日本軍はハワイ真珠湾に碇泊するアメリカ太平洋艦隊の空襲を始めた。日本放送協会は午前7時の「臨時ニュース」で日本の開戦を知らせた。「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部、12月8日午前6時発表、帝国陸海軍は、今8日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」。大本営発表後に各新聞社はただちに「号外」を編集し発行した。号外を2回、3回発行した新聞社もあった。

[4] 第2段落

私は周囲の世界が、にわかに、見たこともない風景に変わるのを感じた。基礎医学の建物も、樹立ちも、同級生の学生服も、一年以上の間毎日見慣れてきたものであり、それはそのまま、初冬の小春日和のしずかな午前の光のなかでありながら、同時にはじめて見る風景の異様に鮮かな印象をよびました。住み慣れた世界と私との間をつなぐ糸が、突然切れたとでもいうことであろうか。しかしそれは、説明にすぎないだろう。その感覚的な印象は、たとえばものの味のように、言葉ではいいあらし難いが、実に鮮明なもので、再び同じ経験をしたときには、ただちにそれとわかるにちがいないほどはっきりしていた。現にいくさが終って後、母が死の死のうとしていたときにも、私の周囲では、風景が全く同じように変った。またあるひとりの女に出会ったときにも、東京の街がもはや同じ東京の街ではなくなったことがある。しかしそのために、私が何か特別の事をいったり、したりしていたわけではない。いくさのはじまりを知ったときにも、私は同級生の群のなかを何事もなかったように、附属病院のほうへ歩きつづけていた。その頃の私はいくさが近づきつつあることを知らなくはなかったが、米英両国を相手にしてのいくさがほんとうにおこるだろうとは信じていなかった。私は私自身の結論が現実になること——殊にその晴れた冬の日の朝の現実になるだろうということ——を信じていなかった。私は同級生たちと、そのまま、附属病院のなかの階段教室へ入り、診断学の講義——でそれはあったろう——が、いつものようにはじまって、いつものように終るのを、茫然と見まもっていた。講義の内容は耳に入らず、ただ落着きはらった教授が今朝の号外のことを知っているのだろうか、それともまだ知らないのか、何事もおこらなかつたかのように平然としているのだろうか、と考えつづけていた。(169—170 頁、改 191—193 頁)

(1) 見たこともない風景に変わる

① 「私は周囲の世界が、にわかに、見たこともない風景に変わるのを感じた」。

「周囲の世界が、にわかに、見たこともないような風景に変わるのを感じた」というのだから、開戦の知らせは衝撃的なことだったに違いない。アメリカ、イギリスとの戦争の可能性が高いとは考えていたが、それが今日この日だとは思っていなかった。加藤は放送による臨時ニュースも新聞の号外も知らなかったということだろうか。

しかし、大きな事件も、小さな事件も、あらかじめ、青天の霹靂の如くに起きる。

② 「見たこともない風景に変わる」三つの場合

ここに描かれる「いくさが始まった」場合

ひとつは「母が死のうとしていたとき」とここでは書かれる。

『続羊の歌』「京都の庭」に「母が死んだとき」として語られる。

もうひとつは「あるひとりの女に出会ったとき」

つまり、いくさと身近な人の死と心をときめかせる女性との出会いのとき

(2) いくさ

加藤は「いくさ」と書いて「戦争」とはあまり書かない。

「いくさ」と「戦争」とは意味は同じか、違うか？

(3) 何事も起こらなかつたように

「教室での教授は「何事も起こらなかつたように平然としている」、と『羊の歌』には書かれる。

この件も『青春ノートⅧ』の記述とは異なる。『青春ノートⅧ』には、

「T教授が授業のあとで、手術台に手をかけながら、《医学生の覚悟》を促す。《はぢまりましたね、かう云ふ緊張した所で勉強するのも、男子の本懐ですか。やませう》と、S助教授は胃癌を論じはぢめる」

と記される。

あるいはT教授やS助教授のほかにも、何事もなかったかの如くに平然と授業を始めた教師もいたのかもしれない。その一方を『青春ノート』に残し、もう一方を『羊の歌』に留めたのか。

(4) ヴェルレーヌ&ヴァレリー

『青春ノートⅧ』によれば、加藤はT教授やS助教授の言葉には共感を示さず、ヴェルレーヌやヴァレリーや広重に想いを馳せたことを記す。

もっとも静かなるものは空である。今日、冬の空は青く、冷く、澄んでゐる。水のやうに静かに。ヴェルレーヌの聖なる静寂を想はせる。Le ciel par-dessus les toit, —何と美しい言葉であらう。そしてヴァレリー海辺の空！ Toutes choses, au tour de moi, étaient simples et pures : le ciel, le sable, l' eau. のみならず maison de charité を出た僕は、西の空、工場の煙突の上に、折から暮れやうとする廣重の空を見た。

(「一九四一年十二月八日」『青春ノートⅧ』)

さらに続けて加藤は

「僕らの必要とする覚悟は弾丸に対するものであらう。或ひは飢えに対するものであらう。弾丸や飢えは僕を変へるであらう。勇気が要るのもその時であらう」(同上)

と心境を綴る。

12月8日の太平洋戦争開戦日に、**飢えを恐れ、弾丸を恐れ、かつ飢えと弾丸が自分を変えてしま**うかもしれないことを恐れた日本人はきわめて少なかったに違いない。高校生のときから、公安警察に拘引されることを恐れながら日々を暮らしていたからこそその反応といえる。

なぜ『羊の歌』では『青春ノートⅧ』と異なる記述をしたのか。

その理由として考えられるのは、加藤のもっていたふたつの心の動きを表現した、ということかもしれない。『羊の歌』に描かれる加藤は、開戦を知って茫然自失とまではいかないまでも、大きな衝撃を受けた。『青春ノートⅧ』に描かれる加藤は、あくまでも冷静沈着である。一方では、とうとう始まってしまった、という衝撃があった。もう一方には、今後にもたらされる戦争の自分との関係への影響を見つめる冷静さがあった。その二つの心の動きをひとつずつ書きわけたのだろうか。

[5] 第3段落

「どうなるのだろうかね」と母は、私在家へ戻るといった。「勝ち目はないですね」と私は吐きだすようにいった。「そうかしら?」「他に考えようがないですよ」「海軍大臣が無鉄砲だから、あれでは心配だと伯父さまもいらっしやっただけれど。……大変なことになるかもしれないね」「なるでしょう、もちろん」「そんなことを、誰にもいわない方がいいよ」と母はいった。

- ① 「どうなるのだろうかね」と聞かれて「勝ち目はないですね」と吐きだすようにいったのは憤懣やるかたなく、母織子に苛立ちをぶつけた結果だろう。
- ② 太平洋戦争開始時点での「海軍大臣」は嶋田繁太郎(1883—1976、在位は1941年10月—1944年7月)である。もともとは海軍の不戦派であったが、海軍大臣に就くと、不戦論から主戦

論に転向し、陸軍との協調を図って、日米開戦の道を急いだ（伏見宮の助言に従った）。山本五十六は嶋田に対して批判的であった。

- ③ 「伯父さま」とあるが、実際は「大叔父」の——実際に呼ぶときは「おじさま」だったのだろう——岩村清一である。岩村は山本五十六に近い将官であり、海軍リベラル派。加藤の家でも、嶋田を批判することがあったのだろうか。
- ④ 「そんなことを、誰にもいわないほうがいい」
母織子は忠告するが、戦時にはこの程度での予測を述べても、密告され、官憲に拘引される可能性があったことを意味する。

[6] 第4段落

その日の夕方から、空襲に備えて燈火管制がはじまったが、私はその晩の新橋演舞場の切符をもっていた。演舞場は、文楽の引越興行であった。「出かけなくてもいいじゃないか」と母はいった、「無駄足になるかもしれないし……」。私は母が「無駄足」を心配しているのではないことをよく知っていた。しかし「やっていたら、すぐに帰って来ますよ」といって、家を出た。地下鉄は平常どおりに動いていた。銀座四丁目で降りると、街は暗かった。新橋演舞場のまえには、ほとんど人通りがなく、ほの白い夜空の下に演舞場の建物だけが黒い大きな塊のように静まりかえっていた。なるほど引越興行は中止らしい、と私は思った。しかし念のために入口まで行ってみると、意外にも、入口は開いていて、受付の男もいた。観客の姿はどこにも見えなかったが、私は切符をさし出して、劇場の中へ入った。二階の観客席には、私の他にひとりの客もいなかった。私は前へ行って、真中の席に坐った。平土間を見下すと、四、五人の男が、離れ離れに坐っているだけで、芝居のはじまりそうな気配はない。支配人が何かが出て来て、切符の払戻しの説明でもするのだろう、と私はもういちど考えた。そのときである、義太夫の語り手と三味線の男があらわれて、席に着いたのは、「相勤めまする太夫は……」という名乗り、あのさわやかな拍子木の音が、客のいない劇場のなかに鳴り響いた。そして幕があき、人形が動きだした。私は忽ち義太夫と三味線の世界のなかへひきこまれていった。「今頃は半七さん……」——たしかにそれは異様な光景であった。古靱大夫は、誰も見ていないところで、遠い江戸時代の町家の女となり、たったひとり、全身をよじり、声をふりしぼり、歎き、訴え、泣いていた。もはやそこには、いくさも、燈火管制も、内閣情報局も、なかった。その代りに、何ものを以てしても揺り動かし難い強固なひとつの世界、女の恋の歎きを、そのあらゆる微妙な陰影を映しながら、一つの様式にまで昇華させた世界、三味線と古靱大夫の声の呼吸に一分の隙もない表現の世界が、あった。その世界は、そのときはじめて、観客の厚い層を通してではなく、裸で、じかに、劇場の外のもう一つの世界——軍国日本の観念と実際のすべてに相対し、そのあらゆる自己充足性と自己目的性において、少しもゆずらず、鮮かに堂々と、悲劇的に立っていた。古靱大夫は孤軍奮闘していたのであろうか。そうではあるまい、江戸文化のすべてが、その身体のなかに凝縮していたのだ。肉体と化した文化……そういうことが、言葉としてではなく、動かすべからざる現実として私の眼のまえにあった。他の何が必要であったろうか。(170—172 頁、改 193—195 頁)

(1) 「燈火管制」

太平洋戦争が始まった 1941 年 12 月 8 日から 1945 年 8 月 15 日の未明までの、3 年 8 カ月余りずっと敷かれつづけた。燈火管制は 1937 年に施行された「防空法」に基づく措置であるが、警戒管制と空襲管制との二段階に分けられた。

警戒管制は警戒警報の発令とともに行なう灯火管制であり、空襲管制は空襲警報の発令とともに行なう灯火管制である。いずれの場合も屋外の門燈などは消燈し、屋内については、警戒管制の場合は減光かつ遮光をしなければならず、空襲管制の場合は隠蔽（外に一切の光を出してはならぬ）をしなければならなかった。これに違反すると隣組から「利敵行為」だと非難されるので、実施度はきわめて高かった。しかし、アメリカの本格的空襲はB29を使って行なわれ、同機種はレーダーを備えており、灯火管制は実際には何の意味もなかった。

（2）文楽を見に行く

「太平洋戦争開戦の日に文楽を見に行った」というのは、『羊の歌』のなかでもとくに有名な件である。太平洋戦争開戦の当日に、滅びるだろう日本文化に哀惜の念をこめて文楽を見たということ、しばしば文筆家やジャーナリストによって引用されてきた。

しかし、私は、この日に文楽を見に行ったというのは、虚構を施した「創作」である、と判断する。その理由は以下の通りである。

① 『青春ノート』に言及がない

『青春ノートⅧ』「一九四一年一月二日」によれば、加藤は大学から自宅に戻り、レコードでショパンの音楽を聴く。そして「豊増昇のベートーヴェンをきまに行かうと思つたが、妹が心細いと云ふからやめた。警戒管制の家でショパンのワルツをきまながら、この文を草する」とある。

豊増昇（1912—1975）は、佐賀県出身の戦前から戦後にかけて活躍したピアニストで、指揮者の小澤征爾やピアニストの館野泉の師匠である。豊増は1940年から41年にかけてベートーヴェンのピアノ協奏曲およびピアノ奏鳴曲（ソナタ）の全曲演奏に挑んでいた。

『青春ノートⅧ』に従えば、加藤は豊増の演奏会の入場券をもっていた。しかし、妹が心細いといつたので、いったんは外出を止めた。このあたりの叙述について、実妹本村久子氏に確認すると、記述の通りである、といわれた。

ところが、加藤は夕刻になって、やはり出かけた。「母は外出を何度も止めました」と久子氏は証言する。それを振りきって加藤は出かけた。行く先については「さあ、コンサートだったかしら、そのあたりの記憶は、はっきりいたしません」という微妙な表現をされた。久子氏は記憶力や判断力がきわめてよい人だと私は理解している。

12月8日夜に「豊増昇洋琴独奏会」が明治生命講堂（東京・丸の内）にて催された。ベートーヴェンの最後の三つのピアノソナタ、すなわち作品109、作品110、作品111が演奏された。ベートーヴェン・ピアノ曲の連続演奏会の最終回であった。

一方、大阪・文楽座の公演は夕方から新橋演舞場（東京・今日の東銀座）で始まった。開演時間はおよそ2時間しか違わない。したがって、両方を見ることはほぼ不可能である。加藤は、豊増昇の演奏会の切符を入手していたうえに、さらに『羊の歌』に書かれるように、文楽の切符を入手していたのだろうか。しかも『青春ノートⅧ』の「一九四一年一月二日」の項には、豊増昇のベートーヴェンには及ぶが、文楽にも豊竹古鞠太夫にも触れていない。そればかりか、8冊の『青春ノート』のどこにも、一語も記されていない。

しかも『羊の歌』のなかで、文楽に触れるのはこの件だけである。日本の伝統演劇について語り、歌舞伎役者や能役者を述べたところでも、古鞠太夫についてはまったく触れていない。

そもそも加藤が**文楽を好んだのか**、という疑問さえ残る。

←加藤が文楽を好むだろうか、という疑問が私にはあった。

② 「今頃は半七さん……」

疑問を解くひとつの鍵は、加藤が引用した「今頃は半七さん……」という科白が握っているのかもしれない。これは『艷容女舞衣（はさすがたおんなまいぎぬ）』「酒屋の段」の科白である。

酒屋の半七は女房お園をもつ身で、女舞芸人の三勝（さんかつ）と抜きさしならぬ関係となり、

三勝とのあいだに子をもうけ、家にも寄りつかない。お園は「今頃は半七さん、どこにどうしてござらうぞ」と歎き、訴え、悲しむのである。『艶容女舞衣』のなかでクドキの場面としてよく知られる。文楽が盛んだった戦前には、『艶容女舞衣』は人気が高くしばしば上演された演目であり、この科白は義太夫を見ない人でも知っていた。

大阪・文楽座の引越公演は、戦争中でもほぼ毎年のように行なわれていた。1941年は11月29日から12月23日まで、新橋演舞場で公演を行なった。そこに古靱太夫が出演したことも記録に残る。

ところが『義太夫年表 第2巻』(国立文楽劇場義太夫年表昭和篇刊行委員会編、和泉書院、2013)によれば、文楽座公演は、12月8日までと、12月9日からとでは、演目が違っている。『艶容女舞衣』「酒屋の段」は12月9日から13日までの演目である。したがって、12月8日には上演されていない。

③古靱太夫は「酒屋の段」を語らず

「古靱太夫」とは、二世豊竹古靱太夫(のちに豊竹山城少掾を名乗る)で、義太夫の名人と讃えられた。加藤の日本の伝統演劇に対する態度は、芝居のドラマトルギーに共感するのではなく、演者の個人芸に共感する。したがって文楽を見に行つたとしても古靱太夫を聞きに行つたのか。

ここにもうひとつの問題がある。『義太夫年表』によれば『艶容女舞衣』に古靱太夫は出演していない。1941年12月だけではなく、古靱太夫は1937年から1945年までのあいだ『艶容女舞衣』を一度も語っていない(『豊竹山城少掾聞書』1949)。

1941年12月に古靱太夫が出演したのは、8日の『義経千本桜』「寿し屋の段」、そして12月9日から13日まででの『奥州安達原』「袖萩祭文の段」である。どちらの作品も「女の恋の歎きを、そのあらゆる微妙な陰影を映しながら、一つの様式まで昇華させた世界、三味線と古靱大夫の声の呼吸に一分の隙もない表現の世界」とはいいにくい。

この表現に矛盾しない演目は、同年12月19日から23日に上演された『天網島』だろう。その「紙屋内の段」の「切」に古靱太夫は出演した。

④垣花秀武氏の二つのエッセイ

垣花秀武氏と加藤は、期せずして、同じ日に同じ劇場で同じ演目を見ていたことを、戦後になって知って、お互いに驚きあう。垣花氏はそのことを二度、文章にしている。一度目は12月9日のこととして書き、二度目は12月8日のこととして綴った。

垣花氏は12月9日に行つたに違いない。しかし、二度目に書くときには、加藤が12月8日に行つたと書いていることを知り、それに合わせたのではなからうか(詳しくは拙著『加藤周一』という生き方』[筑摩書房]参照)。

実妹久子氏が12月8日の加藤の行き先について「さあ、コンサートだったかしら……」と微妙ないい方をされたこととも符合する。

⑤12月8日には文楽に行かなかった

もろもろ考え合わせると、加藤は12月8日には豊増昇のコンサートに行き、12月9日から13日のあいだに、新橋演舞場に行つたのかもしれない。その間に文楽を見たとすれば、『艶容女舞衣』「酒屋の段」や古靱太夫が語つた『奥州安達原』「袖萩祭文の段」を聴いたことになる。

そして『艶容女舞衣』「酒屋の段」の筋に感動し、『奥州安達原』「袖萩祭文の段」の古靱太夫の芸に魅了された。そしてこのふたつを結合させ、12月8日のこととして「文楽の話」を綴つたのではないか。

⑥なぜ12月8日に文楽に行つたと書いたのか

加藤は少なくとも12月8日には新橋演舞場に文楽を見に行かなかったことは確実である。それにもかかわらず、なぜ12月8日に行つたことにしたのか。観たか観なかったかは確かでないが、なぜ『艶容女舞衣』について触れたのか。

12月8日に文楽を見ようが、12月9日に文楽を聞こうが、開戦直後に加藤が文楽を観に行った意味にさしたる違いが生じるわけではない。しかし、その修辭的効果には格段の違いが生じる。このような修辭的効果を意図した文章を書くからこそ、世阿弥の能芸論を「戦術の書」として捉えられるのではなかろうか。

『艶姿女舞衣』『酒屋の段』は、「子を想う親の情」が主題である。それ以外は何も語られない。徹底した「極私的世界」。そこには国家も、戦争も、世間も入りこまない。そういう世界を戦争が始まるそのときに演じられたことに共感があったのではないか。

(3) 古靱太夫対軍国日本

加藤は古靱太夫の身体に江戸文化のすべてが凝縮されていると理解した。

一方、軍国日本は「近代文化」の産物である。→「軍国日本の観念と実際のすべてに相對し」

(cf) 永井荷風も谷崎潤一郎も同じ：『細雪』を掲載した『中央公論』を発売禁止にした理由しかし古靱太夫は「悲劇的に立っていた」

そのように書いた理由は、軍国日本のすべてに相對しているが、負けるだろうという認識すなわち、日本文化は亡びるだろうという意識

[7] 第5段落～第7段落

爆弾は、私たちの頭上に、すぐには降って来なかった。開戦の「詔勅」の後には真珠湾の大勝利を聞いた東京は、有頂天となり、狂喜してほとんど手の舞い足の踏むところを知らなかった。

「ぼくは愉快だね、軍歌を歌いだしたい気もちだ」とある大学の教授はいった。米国の太平洋艦隊は全滅した。「痛快だね」と学生たちはいった。新聞では、有名な歌人が、「真珠湾」の歌をつくり、詩人が生きてこの盛事に臨んだことを、天に感謝していた。

翌月の雑誌では、学識経験者が、これこそ「近代の終焉」であるといい、「大東亜共栄圏への道」はひらけて、大日本帝国の前途は洋々としていと書いた。艦政本部長として開戦に批判的であった伯父さえも、こういった、「しかし真珠湾が、作戦としては予想以上の成功だったことは争えないね。……」——そしてもちろん、日本の真珠湾攻撃を知って、手の舞い足の踏むところを知らなかったのは、東京だけではなかった。当時の私は何も知らなかったけれども、おそらくベルリンだけを唯一の例外として、ほとんど世界中の首都はその報らせに歓喜していた。モスクワは、日本軍が北へ向う代りに南へ向ったのを知ったとき、ゾルゲの情報の正しかったことに安堵したにちがいないし、ロンドンは米国の参戦を確実にした日本の行動に狂喜していたはずだろう。事件を知った亡命中のドゥ・ゴール将軍は、言下に、「これで勝負はきまった」と呟いたという。米国では——太平洋問題研究所の会議で、クリーヴランドに集った学者たちが、日本は参戦しないだろうという議論をしていた真最中に、真珠湾奇襲の報らせがとどいた。学者たちはわが耳を疑ったが、気をとりなおすと、会議を中断し、「ファシズムの没落の確定した」ことをよろこんだ。東京市民は、世界中がよろこんでいることを知らなかったから、みずからよろこんでいたのである。私は、そのよろこびを暗澹たる気もちで眺めていた。そのときほど私が東京の人々を遠くに感じたことはない。東京が焼けたときには、私は焼け出された人々の近くにいた。焼夷弾で火傷した患者の手あてに、万事を忘れて熱中していた。いくさのあとで、東京を離れたときには、地球の反対側で、東京の人々の多くを身近に感じ、海外放浪の時間が長くなればなるほど、私は私自身のなかの東京を考えた。しかし「真珠湾」の日に、私は歓呼する人々のなかの一人ではなかった。「真珠湾」の日に、古靱大夫の語る「日

本」が近ければ近いほど、勝ち誇る軍国「日本」は遠かった。しかし古籓大夫が語ったのは、決して過ぎ去った遠い昔の物語ではなく、私自身の情愛の絆、小さなよろこびと悲しみのすべて、とどめようとしても消え去って行くもの、かけがえのない私の唯一の世界そのものではなかったろうか。(172—174 頁、改 195—197 頁)

(1) 真珠湾攻撃の反応

太平洋戦争は、対外的にはアメリカとイギリスに対する宣戦布告をもって——これは駐米日本大使館の不手際で真珠湾攻撃のあとになった。そのことは、国際法違反として、アメリカ国内に反日の機運を一気に高めた——、国内的には昭和天皇の「詔書」をもって、始まった。真珠湾攻撃の直後には、その成功に日本国中が湧いた。

①太平洋艦隊は全滅したか？

「米国の太平洋艦隊は全滅した」とあるが、真珠湾攻撃はアメリカ太平洋艦隊の八隻に損害を与えた。ところが、日本軍の攻撃が艦船中心であったため、港湾施設はそれほどひどい損害を被らず、艦船の修理が可能であった。損害を受けた八隻の軍艦のうち二隻は除籍になったが、残りの六隻は太平洋戦争中に復帰している。おそらく日本軍も日本のジャーナリズムも、アメリカ軍の艦船修理能力まで計算に入れていなかったに違いない。

②米軍による空襲

東京への空襲は1942年4月に単発的であったが、本格的な空襲は、1944年11月から始まる。サイパンから出撃するB29による爆撃が始まる。

③大学教授、歌人、詩人、学識経験者は誰か？

「ぼくは愉快だね」といった大学教授はおそらく辰野隆だろう。

そのように判断する理由は「仏文研究室」の章に「辰野先生は、いくさのはじめの頃、日本軍の大勝利をよるこんでいた。「真珠湾」は、「痛快な」活劇であった」(183 頁、改 207 頁) とあるからである。「有名な歌人」とは齊藤茂吉に違いなく、「詩人」とは高村光太郎だったろう。

茂吉はおびたしい数の戦争讃歌を遺しているが、開戦直後に

学校より帰りて居りしわが娘と正午勝鬨に和しをはりけり (『大東亜戦争歌集愛国編』)
われ遂にこの戦に生きあひておごそかに幸のかぎりぞせむ (未刊歌集『とどろき』)
大きな時に会ひつつはふりくる勇みの涙のごひにのごふ (同右)

と詠んだ。戦いが始まったことに、娘とともに勝鬨をあげ、限りない幸せを感じ、感涙にむせんだ。

高村光太郎もまた戦時下に戦意発揚の歌をしきりにつくった。

一二月八日

記憶せよ、一二月八日。
この日世界の歴史あらたまる。
アングロ・サクソンの主権、
この日東亜の陸と海とに否定さる。
否定するものは彼等のジャパン、
眇たる東海の国にして
また神の国たる日本なり。
それを治めしたまふ明津御神なり。
世界の富を壟断するもの、
強豪米英一族の力、

われらの国に於て否定さる。
われらの否定は義による。
東亜を東亜にかへせといふのみ。
彼等の搾取に隣邦ことごとく瘦せたり。
われらまさに其の爪牙を摧かんとす。
われら自ら力を養ひてひとたび起つ、
老若男女みな兵なり。
大敵非をさとるに至るまでわれらは戦ふ。
世界の歴史を両断する
一二月八日を記憶せよ。

(1941年12月10日作。『婦人朝日』1942年。『大いなる日に』収載)

「近代の終焉」を謳った学識経験者は多数いるが、保田與重郎もそのひとりであり、「近代の終焉」は、日本浪漫派や京都学派の人びとが主張した「近代の超克」とほぼ同じ主張である。

④国内の反応

真珠湾攻撃は、「手の舞い足の踏むところを知らない」ほどに、日本人に狂喜をもたらしたが、世界各地の指導者たちにも「手の舞い足の踏むところを知らない」ほどに、歓喜を捲きおこした。わずか一〇行のあいだに二度遣われている。この「手の舞い足の踏む所を知らず」といういい廻しは加藤がよく遣う常套文句のひとつである。すでに『羊の歌』99頁1行目(改112頁1行目)にも遣われているが、このいい廻しを軸にして、日本の受けとり方と世界の受けとり方が大きく異なることを、二項対照的に描きだす。

⑤ドイツの反応

「ベルリンを例外として」というのは、ヒトラーは日本の真珠湾攻撃の事実を知って愕然としたという。そのことによって、アメリカが参戦することは間違いないと考えたからである。

⑥ソ連の反応

日本が北進し、ソ連と対峙することを恐れていたスターリンは大いに喜び、対独戦争に全力を注ぐことができるようになった。

「ゾルゲの情報」とは何か。リヒャルト・ゾルゲ Richard Sorge (ドイツ人、コミンテルン情報局員)は、尾崎秀実(朝日新聞記者)とともに、日ソの平和維持を図るために、日本国内で情報活動に従った。彼らがソ連に伝えた情報は、日本の機密情報を盗んだのではなく、見聞できた事実から綿密な分析を重ねて導きだした情報だった。その情報はきわめて確度が高かったといわれる。大日本帝国が大陸をさらに北進してソ連と対峙するのか(北進説)、太平洋に向って戦線を拡大するのかは(南進説)、ソ連にとっては重要な問題であった。ゾルゲらは南進説を採り、それを伝えた。大日本帝国が太平洋戦争を始めたことで、彼らの情報・分析が正しいことが証明された。

⑦イギリスの反応

「ロンドンに米国の参戦を確実にした日本の行動に狂喜していた」とあるが、チャーチル首相は、対独戦争に手を焼き、「モンロー主義」を掲げてヨーロッパに不干渉政策を採るアメリカに、何とか参戦させたかった。日本がアメリカ、イギリスに対して宣戦布告したのを受けて、同日にドイツ、イタリアもアメリカに宣戦布告した。これによって、アメリカがヨーロッパ戦線に参戦せざるを得ない状況が作りだされた。チャーチル首相にとっては「思う壺」にはまって、大いに喜んだはずである。チャーチルは『回顧録』のなかに、日本が真珠湾攻撃をしたことに触れて「ヒトラーの運命もムッソリーニの運命もすでに定まった。日本も滅びなければならない」と綴った(チャーチル『第二次大戦回顧録 抄』毎日新聞社、1965)。

⑧フランスの反応

ナチス・ドイツ軍がパリに無血入場するのは、一九四〇年六月一四日であるが、フランスの「ドゥ・ゴール将軍」はロンドンに亡命し、自由フランス軍を組織し、連合軍に加わった。自由フランス放送を使って、国内のナチス・ドイツおよびその傀儡政権ヴィシー政府に対する抵抗運動を鼓舞しつづけた。一九四四年にはアルジェでフランス共和国臨時政府を樹立する。ドゥ・ゴールにとってもアメリカ参戦は、最大の援軍であって、「これで勝負はきまった」と快哉を挙げたというのも、むべなるかなである。

⑨太平洋問題調査会の反応

「米国では——太平洋問題研究所の会議で」というが、これは、普通、「太平洋問題調査会 Institute of Pacific Relations, 略称 I P R」と呼ばれる研究機関のことであろう。その会議の様態を細かく伝えるが、おそらくこの事実は、1960年代にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に赴任中に、太平洋問題調査会の構成員だったウィリアム・ホランドから聞いた情報に基づくと思われる。

「太平洋問題調査会」とは、1925年に発足した太平洋地域に利害関係をもつ諸国家・諸民族の相互理解と情報交換を目的とする国際的な調査団体である。日本、中国、朝鮮、アメリカ、イギリス、オーストラリアなどの民間有識者によって組織されていた。日本からは新渡戸稲造や井上準之助が参加した時期もある。1938年以降は、日本は事実上脱退していた。

1950年代にはアメリカに「赤狩り」の旋風が吹き荒れ、I P Rは共産主義的団体と批判され、I P Rはカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に拠点を移した。

⑩加藤の反応

このような世界の政治的指導者、あるいは知識人が見せた太平洋戦争開始への受けとり方を、東京の人びと、あるいは日本の人びとは知らなかったから、素直に喜んでいられたのだ、と加藤はいう。しかし、加藤として世界の指導者や知識人の反応を知っていたわけではなかった。にもかかわらず、加藤は太平洋戦争が始まったこと、そして東京の人びとの反応を暗澹たる思いで受けとめた。大多数の日本人と違って、太平洋戦争開始を喜ばず、有頂天になれず、またしても自分が「少数者」であり「余所者」であることを意識させられるのである。

「そのときほど東京の人々を遠くに感じたことがない」というのは、そのときに「余所者」であることをもっとも強く意識させられたということである。

続けて「東京が焼けたとき」のことが綴られ、ここでは「患者の手あてに、万事を忘れて熱中していた」とだけ記されるが、「内科教室」の章では、「私がほんとうに東京市民と共にあり、彼らと共に一体となって生きていると感じたのは、東京爆撃が現実となり、市外の三分の一が焼夷弾で一晩のうちに焼き払われた後のことである」(209頁、改236—237頁)と書きとどめた。

真珠湾攻撃の報に、東京の人びとが歓喜していたかどうかについては別の証言もある。たとえば、フランス人ジャーナリストのロベール・ギランは、開戦の日、東京の人びとが開戦を静かに受けとめていることを記録した(『アジア特電』平凡社)。歓喜していたのは、政治的指導者と日本浪漫派や京都学派に親近感を抱く知識人、そしてメディアの人びとではなかったろうか。

加藤は古籟太夫が語る「日本」を限りなく近くに感じ、勝ち誇る軍国「日本」、そして軍国「日本」を支持する知識人、メディアを限りなく遠くに感じた。

勝ち誇る軍国「日本」の意味は分かつとして、古籟太夫が語る「日本」とは、どういう意味だろうか。それはひとりの人間とひとりの人間の作りだす小さな世界、そこには生きる喜びがあり、悲しみがあ、希みがあり、諦めがあり、愛があり、憎しみがある。そういう、ひとりひとりの小さな世界を「かけがえのない」ものとして大事にすることではなかったか。

加藤の思想と行動の核の部分には、私的な、小さな世界を「かけがえのない」ものとして大切に生きていくという姿勢がある。加藤は理想主義的に、あるいはイデオロギーとして「平和」や「反戦」を主張したのではない。眼の前にいるひとりの人間を限りなく大切にしたい、という溢れる思

いがあり、それが「反戦」や「平和」を主張させるのである。このような加藤の考え方、あるいは感じ方を見のがすと、加藤の知の世界を正確に理解することにはならない。理想主義やイデオロギーは時代の変化や官力の圧力によって捨ててしまいやすい。しかし、目の前にいる人間を大切にするという態度は変わりにくい。加藤が時代を越えて一貫して「平和」や「反戦」を主張しつづけたのは、こういう「核」をもっていたからだ、と私は確信する。

[8] 第8段落

私の予想とはちがって、いくさのはじめの頃の東京では、日常生活に大きな変化がなかった。英米軍は、中国の戦線よりも、もっと遠い彼方にあつた。私は本郷の大学へ世田谷の赤堤の家から通っていた。それより早く、美竹町の祖父は、その商売が傾いてきたときに、家屋敷と共に、渋谷の土地を抵当に入れ、それが抵当流れになったとき、目黒区の小さな家に移り、私たちも美竹町の家を売って、赤堤の借家に住んでいたのである。その頃から祖父は、陸軍の恩給の他に、道具類を売って暮しながら、ひそかに「小説」を書いていた。「あれは小説ではなくて、御自分ののろけ話ではありませんか」と私の母は笑っていたが、祖父はすべてが過ぎ去った後に、忘れ難いものを、何かの手段で残そうとしたのであろう。その「小説」には、金もうけの話も、いくさの話もなかった。短い旅へ出たときに東京駅まで送っていった私の母のさりげない言葉、買物へ連れだした孫たちの笑い声、うまく行かなかった商用に疲れ果てて訪ねていったとき、祖父の古い女友達が示したいたわりと、そのいたわりを相手に感づかせまいとした心使い……すべては小さな、ありふれた出来事にすぎなかった。私は祖父の不器用で古風な文章を辿りながら、なぜ祖父がそれを書かずにいられなかったかということ、実にはっきりと感じた。それは、生涯を通じて、現在のなかに生きるよろこびを求めつづけてきた人の、過去への執着であった。老いた祖父はまもなく目黒の小さな家で死んだ。(174-175頁、改版197-198頁)

(1) 日常生活の変化はなかった

12月8日に、日本、ドイツ、イタリアから宣戦布告を受けたアメリカは、まずヨーロッパ戦線に重点をおいた。これはイギリスのチャーチル首相の要請でもあった。しかも日米の戦線は太平洋のかなたであり、日本本土が直接的な被害を受けることはなかったから太平洋戦争開戦によって「日常生活に大きな変化がなかった」のである。

美竹町の広い屋敷は、祖父熊六と叔母道子の所有であった。その不動産を抵当流れで失うと、祖父と道子一家が目黒区宮前町に二軒の家を買って、引っ越した。加藤の家も土地は叔母道子の所有になっていたから、上物を売って世田谷区赤堤に借家住まいしたのである。

祖父は「ひそかに「小説」を書いていた」。小説の「質」には言及されない。その内容は「すべては、小さな、ありふれた出来事」にすぎなかったが、なぜ祖父がこのような小説を書いたかについて、加藤は「現在のなかに生きるよろこびを求めつづけてきた人の、過去への執着」だと理解し共感した。祖父が亡くなるのは1939年である。

[9] 第9段落

赤堤の借家で、私の父は開業をしなかった。伊豆の結核療養所で働き、ひとりでそこに住んで、東京へ帰って来ることは稀であった。私は母や妹と共にときどき父の伊豆の住まいを訪ねた。そこには潮の香と、丘の斜面を蔽うみかん畑と、夜枕もとまできこえる高い波の音があった。しかし家族の他にはひとりの話相手もなかったので、東京へ戻って来ると、私は息をふき返したように思った。話相手は東京でも、いよいよ少くならうとしていたが、またその少い話相手に出会うことが、私にとっていよいよ必要になっていたのである。(175頁、改198頁)

(1) 伊豆の結核療養所

祖父のあとに父について触れる（二項対照法）。金王町でも美竹町でも、父信一は「加藤医院」を開業していた。しかし、開業してもうまくいかないことを悟ったのか、赤堤では開業しなかった。開業しない代わりに病院勤めを始めた。その病院を加藤は「伊豆の結核療養所」というが、実妹久子氏は「父が伊豆の療養所に勤めたことはありません。父の赴任先は三浦半島の野比の海軍病院でした」という。野比の海軍病院とは、1941年に横須賀海軍野比分院としてできたが、1942年に野比海軍病院として発足した（今日の国立病院機構久里浜医療センター）。

(2) 話相手

人間は話し相手がいないと、心の平安を保てない（昨今のコロナによる外出しないこと、施設で面会を受け入れないことは、鬱病を生む要因になっている）。

[10] 第10段落

破竹の勢で進んだ日本軍は、ハワイより先までは行かなかった。政府は「米国征伐」とか「勝利」とかいう代りに、「絶対不敗の態勢」という言葉を使っていた。しかしいくさのまえに「坐して亡びるよりは」といったときの、「坐して亡び」そんな状況から、どうして「絶対不敗」の状況が生じたのだろうか、ということの十分な説明はなかった。南方の石油資源を手に入れたといっても、軍備を整えるために必要なのは、資源だけではない。資本、技術、労働力、そのすべての点で、軍備競争は米国側に有利なはずであり、「大和魂」とか「米国は女の国」であるとか、そういう心理的なことは、あまりに漠然としていて考慮の対象にもならぬ。「絶対不敗」はおそらくまちがいであり、日本は敗れるだろう、と私は考えていた。しかしいつ敗れるだろうかを判断することは、できなかった。百年先ではないが、明日ではない。とすれば、今日明日の私の行動と、その私の判断とは、直接の関係がないだろう。「必勝の信念」に燃えていても、「必敗の予想」をたてていても、私が毎日医学校へ通うということに変わりはなく、医学校で覚えることには、なおさら変りがない。また私が物資の買溜めをしたり、先を見越して「疎開」の支度をしようと思えば、そのために必要な判断は、何年か経って日本が敗れるか敗れないかではなく、明日どういう物資が不足するか、いつ東京が爆撃されるか、ということであったにちがいない。現に私の周囲には、まもなく、「必勝の信念」に燃えながら、罐詰の買溜めをしたり、軍需物資を買占めてもうけたり、敏捷に「疎開」の準備にたち廻ったりする人々があらわれてきた。しかし私は、買溜めも、「疎開」の準備も、その他いかなる具体的な行動も、考えなかった。具体的な行動に役立つような判断を下す条件があたえられていなかったから、行動を考えなかったのではなく、そもそも行動を考えなかったから、判断を私自身の行動とは無関係な領域に限定して怪しまなかったのである。行動と関係のない判断において、希望的観測を排することは、容易であった。私は「没落」の過程のなかにあった家族とつき合いながら、日本帝国全体の「没落」を予想していた。いずれの場合にも、「没落」を理解する以外に「没落」を越える道はないように思われた。（175—176頁、改198—200頁）

(1) 破竹の勢

1941年12月8日の真珠湾攻撃から、1942年6月5日から7日にかけてのミッドウェー海戦までは、日本軍はそれこそ「破竹の勢」で進軍した。アメリカ政府は、日本軍のアメリカ上陸まで想定していた。しかし、ハワイから先には進めず、ハワイより西方にあるミッドウェー海戦で四隻の空母を失って、戦局は大きく転換する。すなわち最初の半年間だけは勝利していたが、それ以後は敗戦の連続だった。にもかかわらず止めることができなかった。いったん始めた戦争は、止めることのほうがむづかしい。ことに宗教戦争、イデオロギー戦争の場合に顕著になる。

(2) 「座して亡びるよりは」

「**坐して亡びるよりは**」というのが、戦前の大日本帝国の風潮であった。「坐して死を待つよりは、出でて活路を見出さん」(『三国志』)。どうせ死すならば、何をしないで手をこまねいて死すよりは、武器をとって戦って死すべしということである。この風潮の背景には、日本が戦争しなければならないのは、西洋列強の不当な圧力があつたからであり、その圧力に屈しないで戦おう、という考え方がある。勝ち負けの問題ではなく、**正義の問題だと主張**する。しかし、これは「**絶対不敗**」とはまったく次元が異なる問題である。

(3) 戦争と私的利益の追求

①体制の崩壊と個人的利益の追求

戦争というものは、いつでも、どこでも、多くの人が苦しみ、傷つき、命を落とすことになるが、少数の人は、戦争によって利益を得ることができるものである。それは敗戦後も同じであつて、日本の敗戦後の状況は『続羊の歌』「信条」の章によく描かれる。

目先の利く人たちには戦争のさなかであつても、私的利益を追求する機会になる。「**買溜め**」や「**疎開の準備**」などに走るのを見ながら、加藤はそういうことには一切の関心をもたず、ひたすら戦争の行方を見定めようとした。これが**加藤の生涯を貫く姿勢**である。

ひとつの体制が終ろうとするとき、その体制を支配していた価値体系が崩れはじめ、体制に対する忠誠も崩れて、無頼、無法者が(善良だった人にもそういう側面が表れてくる) **暗躍**する。なぜ「暗躍なのか」。体制が十分壊れていない段階では、表立っては個人的利益を追求できずに、暗躍にならざるを得ない。

②個人的利益の追求と正確な判断

「**行動**(目的を持った行動——引用者註)と**関係がない半断**において、**希望的観測を排することは、容易であつた**」という表現は、「**観測**」「**観察**」という行為の本質を射抜いている。

目的をもった行動における「**観察**」「**観測**」には、目的に沿った願望が入り込みやすい。目的をもった行動ではないときには、冷静で客観的で正確な「**観察**」「**観測**」がしやすくなる。

(4) 「没落」を理解する以外に、「没落」を超える道はない

「**没落**」を理解する以外に、「**没落**」を超える道はない」という言は、けだし名言であろう。

「没落」の過程に、歴史が抱えていたすべての問題が見えてくる。それが見えるのは、没落の渦中にいる人間であり、そのごく少数者の透徹した観察力、分析力をもつ者のみである。

『平家物語』に描かれる**平知盛**は「見るべきほどのことは見つ」といった。『愚管抄』を書いた**慈円**は、貴族社会の側の人間であるが、歴史が道理によって動くことを見抜いた。『幕府衰亡論』を著わした**福地源一郎**は、江戸幕府側の通辞を務めたこともあるが、江戸幕府の前例踏襲を因として幕府の崩壊は必然の数、すなわち道理だと論じた。いずれも「没落」の側に属し、没落を超えた数少ない人物である。

[11] 第11段落前半

しかし行動において役にたたなかった私の考えは、私と周囲との間に壁をつくることには役立った。次第に国民服のふえて来ていた東京の街を、その頃の私は、旅行者のように歩いていた。旅行者は土地の人々と別の風景を見るのではなく、同じ風景に別の意味を見出すのであり、またその故にしばしば土地の人々を苛立たせるのである、「冗談じゃないよ、そう簡単にいわれては、たまらない……」。東京はまだ**廢墟**ではなかったが、私は眼のまえにあつたほとんど

すべてのものに、それが焼き払われた後の荒涼たる廢墟の幻を重ねて見るがあった。すると、俄かに、あらゆるものが、思いがけない美しさに輝いた。赤門前の果物屋の店頭に積まれたみかんやりんご——冬の午後の陽ざしに照し出されたその色と冷たい肌触りの予感、それだけでも、私をしばらく舗道にたち止らせるのに充分だった。大学の構内の銀杏並木、その枯枝が空に張る細かい網、春先の煙るような緑と、両側の研究室のせまい入口を本や鞆をもって出入りする人々、また三四郎池のほとりの静かな忘れられたような陽溜り、化学教室の赤煉瓦の壁を照し出す夕陽、夕暮れの病院の暗い廊下を行き来する看護婦の白衣、本郷通りの本屋や「白十字」の窓につきはじめた夕べの灯、古本の棚の奥にうずくまって火鉢をわきにしながら帳面を見ている主人……そういうもののすべてが、私をひきつけ、ほとんどいづべからざる感動をあたえた。そういうときに、私は、はじめて、宮城の石垣や千鳥ヶ淵の春の水が光るのを見たといってもよいだろう。いや、そればかりではない。東京の街のざわめき、舗道の凹凸、季節と共に移る風の肌触りのすべてを、私が感じたのは、そのときであった。私は生きのびるかもしれないし、多分生きのびないかもしれない。しかし街を歩いているかぎり、街は私のものでなければならなかった。(176—177 頁、改 200—201 頁)

(1) 旅行者、余所者として観察する

①「余所者」であり「観察者」であることを余儀なくされた加藤は、「旅行者」の意識で東京の街を歩いた。

②「旅行者」とは、「余所者」であり、かつ「観察者」である。余所者の観察者だからこそ、土地の人が発見できないものを発見できることがある。

③東京の街がこれまでとはまったく違って見えた。何の変哲もない光景が、いいいようのない感動を加藤に与えた。

(2) 「荒涼たる廢墟の幻を重ねて見るがあった」

①すでに「東京が廢墟になる予感が加藤の脳裡を支配していた、ということである。

②ここも視覚を中心にして、触角、聴覚にかかわるもの、そして加藤の感性の特徴を示すものが挙げられる。

(ex) 「枯枝が空に張る細かい網」に感動したのは、小学生のときだった。補習から帰る夕暮に桜の枝がつくりだす網の目の美しさを発見した（「優等生」67 頁、改 76 頁）。

(ex) 「化学教室の赤煉瓦の壁を照し出す夕陽」「夕暮の病院の暗い廊下……」「白十字」の窓につきはじめた夕べの灯……加藤がたそがれどきを好むことは、これまでも何回か指摘した。

「白十字」は東京大学正門前にあった喫茶店で、「仏文研究室」の章に、渡辺一夫、中野好夫らとともに談論を楽しんだ場所であることが描かれる。「白十字」は戦後も営業を続けていたが、今日ではなくなった。

③ここに夕暮れ、夕陽が複数取りあげられたのは、たんに加藤の好みにとどまらないだろう。

ここは、大日本帝国の夕暮れを象徴的に表現したものと判断する。

夕暮れには寂寥感と美しさがある。

(ex) シュトラウス一家のヴィンナワルツ、『こうもり』／R・シュトラウスの『薔薇の騎士』

(3) 「はじめて、宮城の石垣や千鳥ヶ淵の春の水が光るのを見た」

①「はじめて、宮城の石垣や千鳥ヶ淵の春の水が光るのを見た」とあるが、加藤がそのときはじめて宮城（皇居のこと。戦前から戦後初期まではこのようにいていた）の石垣や、千鳥ヶ淵の水を「はじめて」見たわけではない。「はじめて、」と読点が打たれることに要注意（後述）。

②「あらゆるものが、思いがけない美しさ」に輝いたことに気づいたのである。この文からふたつのことが浮かび上がる。

③ひとつは、加藤は滅びゆくものに「美」を感じる感性をもっていることである。これは『青春ノートⅧ』にも綴られる。

「この十五年間を、他日後世は、我等が今 Rome の没落を見る如く眺めるかもしれない。(中略)《ほろびしものは美しきかな》……」。

④もうひとつ連想するのは、『日本文学史序説』における建礼門院右京大夫の「星空」の発見の件である。加藤はいう。

今や夢昔やゆめとまよはれていかにおもへどうつゝとぞなき (下巻、二三九)

しかし「失われし時をもとめて」余生を追憶に暮らす女の眼には、現実が夢のようにみえたばかりではなく、また嘗て女房社会のなかに浸りきっていたときにはみえなかったものがみえてきた。「月をこそながめ馴れしが星の夜の」(下巻、二五一)「こよひはじめてみそめたる心ち」(同上、前文)がしたのは、そのためである。月をながめ馴れたのは、文化的組みこまれであって、自然愛ではない。星の夜がはじめてみえたのは、自然の発見である。彼女は、社会を失ったときに、自然を見出した。(前掲書 326 頁、傍点引用者)

⑤『建礼門院右京大夫集』の歌は、「月をこそながめなれしか星の夜の ふかきあはれをこよひしりぬる」(岩波文庫版 121 頁)である。加藤は「失われし時をもとめて」いたのではないが、社会から強く疎外された意識を抱いていた。

⑥いわば「社会を失った」、そのときに、はじめて、皇居の石垣、千鳥が淵の春の水の輝き、いままでは見ても気づかなかったものに気づいたのである。それは建礼門院右京大夫の「星空」と同じである。だからこそ「はじめて」といい「読点」で区切って表現したに違いない。

(4) 「街は私のものでなければならなかった」

①「生きのびるかもしれないし、多分生きのびないかもしれない」が、生きのびたいという加藤の願望を表現した。

②自分は日本というところに居つづけて、観察を続けたいという意思の表現であると理解する。

[12] 第 11 段落後半

その後何年も経って、フィレンツェの広場の石畳を靴の底に感じながら、私は文芸復興期の建物を見廻し、再びここに立つことはないだろう、と考えたことがある。しかしもちろん、その町の人々は、自分たちの商売や、町長選挙や、ぶどう酒の値段や、教会の新しい司祭の男ぶりや、隣の娘が生んだ子供の父親は誰だろうか、というようなことを、あらゆる希望と後悔と、よろこびと悲しみをこめて、考えていたにちがいない。文芸復興期の石畳を感じていたのは、旅行者の私だけであって、毎日買物籠を下げてその上を歩いていた町のおかみさんではなかったろう。私は東京で生きていなかったときに、東京を発見した。「もう一つのドイツ」とトマス・マンがいい、「もう一つの日本」と片山敏彦はいった。しかしそんなことはない。私はそもそものはじめから、生きていたのではなく、眺めていたのだ。私自身はいくさが大日本帝国の正体を暴露したと考えていたが、いくさが暴露したのは実は私自身であったかもしれない。

(177—178 頁、改 201 頁)

(1) 旅行者と生活者の違い

①旅行者

その地に暮らすわけではない。その地に再び来ることはないかもしれない。

その地に決定的に属していないから、その地の今日にも明日にも関与できない。

その地を歴史的にも観察が可能であり、客観的に分析が可能である。

②生活者（町の人々）

昨日も今日も、そして明日も、その地に属して、日常茶飯のことに忙しい日々の暮らしを送る。

その地に決定的に属しているがゆえに、今日も明日も、その地に対して関与できる。

しかし、その町を客観的に正確に観察し分析できるとは必ずしもいえない。

（2）「東京で生きていなかったときに、東京を発見した」

①加藤は東京で「余所者」、「旅行者」として観察していた。

②東京に暮らしていた、あるいは「生きていた」わけではなかった。

③「東京で生きていなかったとき」、すなわち旅行者の感覚で日々を過ごさざるを得なかったときに、加藤は「東京を発見した」のである。

（3）「もう一つのドイツ」「もう一つの日本」

①「もう一つのドイツ」とは、トマス・マンの考えていたことである。

②ナチス・ドイツの有名なスローガン「ひとつの民族、ひとりの総統、ひとつの国家」

《ein Volk, ein Führer, ein Reich》に対するアンチテーゼである。

③片山敏彦がいわんとした「もう一つの日本」もまた「大日本帝国」に対するアンチテーゼ。

④「アンチテーゼ」であろうと、その地に**関与できる条件、意思があることを前提**とする。

（4）「しかしそんなことはない」

①「しかしそんなことはない」とは、どういう意味だろうか。

②トマス・マンにしる、片山敏彦にしる、命を賭けて、力強く生きて「もう一つのドイツ」や「もう一つの日本」を提示しようとした。その地に**関与しようとした**。

③加藤自身は何も提示していない。ただ観察しているだけで、生きてもいない、ということを戦争のなかで悟ったのだろう。

④自分はトマス・マンや片山敏彦とは決定的に違うという意識があったに違いない。

その意識が「そんなことはない」という表現になったように思われる。

⑤しかし、旅行者として余所者として、その地に**関与しようとする人よりも、客観的に正確に観察する自分自身を発見したという自負**でもあろう。

⑥そのように考えた加藤は、もはや「**いくさが大日本帝国の正体を暴露した**」のではなく、

「**いくさが暴露したのは実は私自身であったかもしれない**」と意識した。

⑦その意味では、のちに書かれる「高みの見物」の立場の表明、さらにいえば、加藤の生き方宣言だと私は考える。